巻頭言

機器分析評価センターの一年とこれから

横浜国立大学　機器分析評価センター
センター長　栗原　靖之

今年一年、本センターの活動に対し学内外の皆様のご理解とご協力をいただいたことに深くお礼申し上げます。おかげさまで本センターは様々な困難に出会いましたが、恙なく一年を閉じようとしています。

しかし、社会をみれば新型コロナウイルスの感染が全世界的に拡大し、大きな不安を投げかけています。社会は明るさを失い、見えない道筋に毎日不安を抱える人が多く、一種のパニック状態に陥っているように見えます。大事なことは風評に惑わされず、事実に基づいて歴史に学び、冷静な判断をすることです。人類は有史以来、数多くの感染症に悩まされてきました。その進化的選択によって、感染症に立ち向かう免疫システムの組織適合性抗原の多様性が生まれたと考えられています。つまり、人類はあらゆる、そして出会ったことのない感染症に対し免疫システムの多様性を確保することで生き延びてきました。これは我々に不確定な将来に賢く生き延びる方策の一つが多様性の維持であることを教えてくれます。

国立大学は法人化したことで地域特性に合った大学の多様性を発揮することができるようになったと言えます。しかし、現実は逆で政府施策の中で画一化が進んでいるように見えます。これでは、国立大学は不確定な未来を生き延びていくことは難しいでしょう。

それでは、本学の機器分析評価センターに目を移してみると、大学執行部とセンターに関わる教職員の皆様の協力を得て、国立大学内でも際立って独自の運営方法を導入しています。例えば、学内教職員の機器利用料の無償化や機器維持・管理・撤去基準の制定は他大学では見られない独自の取り組みです。これは、横浜国立大学の共同利用施設として果たすべき役割を忠実に果たす上で堅持すべき多様性の一つです。

次年度、本センターは本学の研究推進機構の一部門として再スタートします。研究推進機構に参入することで、これまで以上に全学的視野に立って機器整備戦略と産学連携事業を推進していくことが可能になります。この激動の時代に多様性を許容し、独自性を失わず、全学の教育研究活動に貢献できる共同利用施設として、本センターの存在意義の達成を目指してまいりますので、引き続きご支援、ご協力くださるようお願いいたします。